



2012年に「メデア」で好評を博したドイツ現代オペラ作曲家アリベルト・ライマンの第二弾「リア」日本初演が2013年11月8～10日に日生劇場で上演されます。公演に先駆け本日5月25日のトークセッションに参加してきました。今回は吾輩の主人：夏目漱石の専門分野のシェイクスピア作品。公演にご興味のある方は、日生劇場ホームページをご覧ください。（文中全て敬称略）

【司会進行】高島勲（日生劇場藝術参与）【出席者】細川俊夫（作曲家） 長木誠司（音楽学・音楽評論）

■「リア」のストーリー

リア王は3人の娘たちに王国を分与して隠居しようと考えている。2人の娘はそれぞれ「全ての愛をお父様に捧げる」と言って要領よく財産分与を受けるが、末娘のコーディーリアは正直者ゆえお世辞が言えず「結婚したら愛情の半分は夫に捧げる」と言って父の怒りを買う。その日彼女には2人の婿候補がいたが、片方は彼女が無一文になると知って辞退。そして彼女を取りなし味方した者は全員追放。リアは表面に騙され真実が見抜けない。さらにリアに次ぐ重要人物グロスター伯には無欲の嫡子と欲深い私生児がいるが、彼もまた然り。治世者としてよくても人間としてはどうか。人間の孤独を知る物語。

■シェイクスピア作品のオペラ化問題

演劇作品をオペラ化するとき、まず声域を決めなければならない。そして複雑なストーリーにはできないので内容を縮約する必要がある。縮約というのはストーリーが一本化していないと難しい。また主役は大概狂って殺される役どころのソプラノでせいぜい2人まで。その点において、ストーリーが複雑に絡み合うシェイクスピア作品で、しかも主役女性が3人も出てくる「リア」のオペラ化は難しい。男性の誰かをカットすると物語として成立しない難しさから、かのヴェルディがオペラ化を諦めた作品。ヴェルディの「リア」のスケッチが今もイタリアのどこかに眠っているという。何故ヴェルディがオペラ化できなかったかという、当時のオペラは演劇そのものを作るため、現代のように心理上のものを音に変える技術がなかった。従って未知のものであった荒野と嵐のシーンを書けなかった。けれどライマンの時代は無意識の表現が可能になった。ライマンの「嵐」はリアの心の中に起ったイメージである。

■ライマンの「リア」～悲しみを叙情的音で救う

ライマンは三人の娘たちに土地を与えるという「運命の嵐」が起る場面から始める。オケの音は入れないソロ。かのフィッシャー＝ディースカウも難色を示した場面である。オケの音を入れなかった理由は「人間の孤独は誰も助けてくれない」という個の内側に焦点を当てたから。歌と音の拮抗するものを敢えて声だけにした。オケが入った時点でオペラが始動し、このモノローグの重要性が解る。そして末娘が相続を拒否する「Nichts!(何も...ない)」というセリフで音が止む。ライマンの音楽は'70年代に出始めた肉厚スタイルの音列手法。細かい音の一つひとつではなく、クラスター(房)状の分厚い音を聴かせる。本年スウェーデンのマルメで初演中の4月28日、指揮者：下野竜也と打合せを行なう。ご存知音楽は劇場に合わせて変わる。その際の注文は「東京ではマルメよりも大きく聴かせたい。入り組んだ大木のようにリアの思考は『誰も助けてくれず、余はただ一人』—リアの脳裏の混乱を誰も理解できない。クレッシェンドを次のフォルテまで可能な限り膨らませる」シェイクスピアの英語の大事なニュアンスが生かせないドイツ語訳。出来るだけ内容を伝えるために重唱が得意なヴェテラン：ヘンデルク版採用。「道化」は本来「喋り」役だが、本作は道化が歌い、歌手が喋る部分が多い。

■カウンターテナー起用について考察

芝居自体は宗教的な所から発生しているが、「リア」は演劇作品で初めて神が出てこない作品。そのためエドガーは全体を見ている立場でリアに運命を告げる役割を担っているため、神に近い存在として人間の日常を超越した両性具有的美声が用いられたのではないか。また多様な男声表現を目指したのか。

■リアの悲劇

リアの悲劇は最後に正気に戻るところ。狂気のみままであったら悲劇ではない。「道化」は正気の間だけリアに従う彼の本心。自分自身が見える位置に自分の精神がある。従って道化は罰せられない。

■演出～栗山民也

舞台を広く使いたいため、日生劇場創設以来、初めてポータル（舞台後方で出演準備するための仕切り）をはずす。24名の二期会男声合唱団出演。

■細川俊夫の「リア」

ミュンヘン・ピエンナーレから依頼されて書いた。ライマンとは対照的アプローチ。死者と生者の対話や自然への畏れ等、元々心理描写要素のある能・歌舞伎がベースにあるため書きやすかったとのこと。海外での評価も高い。演出家によって作曲者の意図とは別物になってしまう場合があり、それを誤解されるのがつらいそうだ。ロンドン版でリア王が新宿の会社社長で、娘たちは秘書というのがあったそう。 「エドガーと父の愛情のかすがいは虹である。悲劇を体感することで得るカタルシス。ライマンのクラスター状に攻めてくる音の厚みから立ち上るメロディーによって精神の浄化を体感してほしい」